

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和四年一月廿八日印刷納本

山とスキー

第九十一號

昭和四年四月一日發行（一月一號）



札幌 山とスキーの會 發行

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號一十九第

記 事

第七回全日本スキー選手権大會の感想

廣田戸七郎〔一〕

第二回學生スキー競技大會を終つて

高橋昇〔五〕

Die Beiden

伊藤秀五郎〔九〕

「對象としての山岳」

井田清〔三〕

—丘への生活に答へて—

三ノ瀬村

〔三〕

寫 眞 版

三選手の勞を謝す

スキー小屋の窓より

岡田次郎

昭和四年四月發行



三選手の勞を謝す

第七回 全日本 スキー選手権大會の感想

廣 田 戸 七 郎

大 き な 期 待

オリムピック派遣選手を迎へての第七回全日本スキー選手権大會は、シーズンに入る前から可成り多くの期待と興味とを持つて居た。

處へ何と云ふスキー界の幸運であるか、スキーの王國ノールウエーからノールウエースキー協會幹部のヘルセット中尉を監督に世界の第一流選手オウレ・コルテルド、ヨオン・スネルスルードの兩君が大倉男爵の御好意によつて我が國に招聘せらるゝこととなり、且つ此兩選手達は高田の全日本大會に出場するといふことになつて愈々大きな期待とそして興味が我等の第七回全日本スキー選手権大會にかけられたのであつた。

ノ ル ウ エ ー 選 手 の 出 場

結果に於てノールウエー選手達は、多くの期待と興味とを裏切つて終つた様なことを言ふ人もあつたけれど、此事は甚だ輕卒の評であると私は言ひたい。

決して兩選手は期待と興味を裏切つた様には競技中やつては居なかつた。兩選手は實の處、競技そのものに對しては、

實は眞面目に競技をやつてくれたのである。そして結果の悪かつたことはあの當時のコンディションとして、恐らくあれが最良の経過であつたと私は考へた。さう考へる程、彼のコンディションは、過重の仕事に追はれて居たのであつた。

成る程札幌を振り出す時から、高田の大會出場の爲の準備はして居たけれど、大鰐へ行き、そして高田へ行つてから毎日の仕事、それは一日一圓三十錢や五十錢貰つて居る労働専門の人達のやる何倍かの労働的な仕事に追はれて居たのである。だから何時も練習と云ふと、自分達に負はされた務を終つてから、レース出場の爲めの練習に出かけて居た有様である。それ故若しもあの競技會出場を唯一の目的として、やつて來たのであつたならば、恐らく多くの人達の期待する程度迄美事な、それこそ日本人達が他山の石とするに足る位の順位に立つたことであると私は信じて居る。然し順位が一とか二とかといふ處に入つて居なかつたからつて、彼等の競技中やつて居た努力は技術や態度で有形、無形に多くの人達を教へて居たことは事實であつた。

過重に仕事を持つた高田スキー團

何故かういふ言葉を使はねばならないか。それは實感がさうさせるのである。

先づあの當時の高田スキー團の仕事を、大きいものを數へただけでも三つはあつた。

第七回全日本スキー選手權大會

ノールウエースキー選手の指導講習會

スキー發祥二〇年記念及記念講演會

等。どれ一つとつても一地方のスキー團體が、全力を傾注してやるだけの大物ばかりである。それを三つも背負つたのであるから、何れの方にも万全を期して進行することが困難であつたことは事實である。

此三つの大仕事の内で目立つて世間に現れて行はれたものが、全日本スキー選手權大會であつた。

過重に失する仕事をどうしても形だけでも實行して行かねばならない。

そこへあの全日本スキー選手権大會が、あの通りの天候に見舞はれたのであつた。たゞでさへ手不足や困難の多かつた時に、天候の不良といふことが、又しても一層万事のコンディションを悪化して終つた。だから競技後峻烈といふよりも常規を逸した様な批評をも受けなければならなかつたのである。

たしかに今度は高田スキー團に荷が過重であつたことは事實であつた。

スキー競技會と天候

高田の競技會ばかりではないが、スキー競技開催と天候といふ關係については、随分私は考へさせられることが多くてならない。

私達は良好な天候の下で、よく整備された競技場で、充分自分達の實力を發揮し得て、競技をやりたいと何時も考へて居た。兎角従來の經驗では悪天候に見舞はれて來て居る。そしてよく整備された競技場といふ點に到つては、スキー競技が未だ年若い歩みにある關係があつたから、兎角不備であつたことは止むを得ないとして考へることが出來やう。といふのは此問題は人爲的に幾重にも改良して行ける問題であるからである。

然し天候に至つては、全く人爲的改良を加へる譯に行かない問題で、之を出來るだけ良い條件に持つて行くといふことは、各地の人達が統計的に良好な天候の巡り合せる頃を調査して置く様にでもして、競技開催の日時を決める様にすれば宜しいと思はれるけれど、之も現在の様に未だ學生が割合に競技の中心をなして居る我が國のスキー競技會では、學生方面の學校關係も大いに考慮する必要があるから、日時もさう減茶に競技を開催する方の勝手に變更することも出來難いことである。

處で我が國の冬のシーズンといふと、何處の土地でも、即ち高田と言はず、北海道、樺太何れでも、一月、二月乃至は

三月中、誠に悪天候の方がむしろ多くて、良好な日は少い、それ故我が國では或程度迄悪天候を豫想して競技開催の準備を充分手廻しする必要が生じて來ると思ふ。夫れ故競技者なども本當にスキの技術と相當の体力の必要以上に餘分な力をも持ち合せねばならないことになる譯である。

今度の高田の競技會があつたのは悪天候の内に終始せねばならなかつたことは、様々の事情から止むを得なかつたことではあるが、然し私は此事については考慮の餘地あることを充分に認めて居る。恐らく將來は改良される處であらう。

高田の競技會後、スキー競技開催地としての問題が随分紙上で論議せられて居るが、若しも各地持ち廻りが、良くないといふことであつたなら、此次の即ち今年の代表委員會で意見ある人は、大いに考へて堂々と改良方針でも話したら良いと思つて居る。



第二回 全國學生スキー競技大會を終へて

高 橋 昇

滿天下の視聽を集めし昭和四年最初の大会も北大の再勝で終つたが、此の大会を通じて見て全國學生對抗競技と云ふのは殆んど名のみであつて、實際は北大と早大との二校の競技の様にか思へなかつたことは、あまりにも興少く、他校の奮起を希望して止まない。

◆大長距離競走

四〇キロ米レースの朝はまことによく降つた、ために市内の交通機關の總てが閉ぢ込められた位であつたにも関わらず、尺余の大雪を蹴たてゝの走路員の努力は感謝の外なくラッセルの難澁と走路員の不足は全コースの完全を期しくもその術なく、不充分とは思ひながらも競技時刻を一時間遅らせて出發させたことは選手諸君に對して申譯がない

次第であるが、當日の状態として止むを得ないことゝ信じます。さしもの降雪も九時頃から小止みとなり、選手出發の頃には太陽の輝きさえ見せて大長距離競技にふさはしい天候となり、呼物の四〇キロ米競技のスタートは拾時一分早大永田選手によつて切られた。

二分明大栗谷川、三分早大矢澤、四分北大小館、五分北大山田と諸豪が揃ひも揃つて若い出發順を引きあてたにか、此の雪の状態では運とはいへあまりにも氣の毒であつた。

オリンピック歸りと外國での活躍で期待された永田選手出發するや間もなくあの坂路を誰もが一分以内で登り切つて姿を消して行くのに、一分二〇秒もかゝつてゐたことは病み上りの身として是非もないとしても、あの苦しそうな

身を最後まで走り続けた努力、不運腰部の病とは云へあまりにも氣の毒であつた。

明大栗谷川選手の棄權は肘に落ちない。ワツクスの失敗とは稱せらるゝものの僅々七キロ米とは餘りにだらしなく拘すべき何物もない。

早大矢澤、北大山田の接戦は當日の白眉、約一〇キロ米の地點通過の時に先頭にやつてきた矢澤君がE—D間にコースのついてなかつたことを話して行くや間もなく約一分おいて山田君が追走して行つたので、心配になつたのは學田山附近のコースだつたので、早速その日あいてゐる某校の人々にお願して小別澤からPQR迄行つて貰ふことを約したが無責任にもその某君等は途中から自校の應援に逃れてしまつたのを知つたときにはもう遅い。矢澤、山田兩君は交代々にラツセルをやつて走つたと云ふが二人の記録を悪くしたことに對して重ねておわび致します。

勿論其の區間には六名の走路踏員を出したのですけれど御存じの通りの其の後のあの降雪ですから。

それにしても記録を悪くしたとは知りつゝも兩君が最後まで力走されたことを喜ぶと同時にE點からコースがなく

て抗議に歸らうかと考へたと云ふことですが、その時の矢澤君の心中を考へて下さい。

彼がE點から歸つて來たら競技はどうなつたでせう。恐らく此の意義ある大會も中止となつたでせう。

此の競技でテクニクとして特に目についたことは北大選手と早大選手のワツクスの相違であつて、早大の後刻よいのに對して北大選手は初に良く、後半の悩みは危い處で巧みに逃れてゐるが、氣温、雪質の變化が今少し早かりせば非常なる不利に入つたかと思はれた。天また北大に幸す。

◆長距離競走

複合十八キロ米の出發する頃合には未だ四〇キロ米の選手は歸り切らなかつた。故に四〇キロ米の最後のヶ所の標旗をたてたまゝあられ降りしきる中を十八キロ米のスタートをさせましたが、その標旗があんな間違ひにならうとは一寸も考へてゐなかつたが、それと云ふのも選手諸君が競技委員であり、そうして諸君の手によつてコースが印されたから既知のものとしてをつたがため、選手諸君が競技

委員であると云ふことは理想には違いない。が實際になし得ない現在の制度に於ては私は心底から反對したい。

次に此の複合十八キロ米と長距離十八キロ米とを別々として走らせたことは僅少な優秀選手によつて多くの點を獲得するを防いだ方法として聞いてゐるが、多くの勞力と時間を要するデスタンス係員の廣汎に亘る心勞を考へたならば、どうしても將來は各校が利害の點で折り合をつけてオリムピックやホルメンコーレンの様式に變へる必要があると思ひます。

此の兩種のレースを見て感じたことは、デスタンスに於ての北大選手の著るしい進境で、殊に複合十八キロ米に於てのワツクステクニツクの進歩、特にそれが最も新らしい *Tanto Wax* の使用になつたと聞き、たへて振はざりし北大デスタンス群のため欣ぶべきことである。又一般に二三名の選手をのぞいて未だマスターし得ないバスガングの走法を利用してゐるのを見受けたが、心すべきことではないでせうか。

◆リレーレース

北大チームの勝を一般ファンはワツクステクニツクの勝利と稱し、又識者もそう信じてゐるらしいが、之には同意致し兼ねる。北大選手の新手に對するに過勞の早大チームは力の和で抗し兼ねる。北大チーム走るにまかす。

此の団体競技の點數が個人競技の點數と同じくあることは解せない氣がする。他にもそんな例はないでもないが他競技とは根本から異なるコンディションの複雑なスキーリレーにあつては、選手の苦心からしても少くとも個人競技の點の二倍にしてやるべきではないかと思ひます。

リレーのコースは別として大長距離や長距離のコースは將來必ず當日發表すべきであると思ひます。

そうすることによつて最も公平が保たれ、同時に競技委員も責任こそ重くはなるけれども仕事は以前よりは樂になるかと信じられます。現在の様に學生自身が定めるとなるとどうしても勢ひその土地の學生による外なくそうなれば選手各自が不快の氣分で會議を進めて行くより外なく、さなきだに地元選手の有利であるのに益々有利になし得るはあまり喜ばしいことではない。

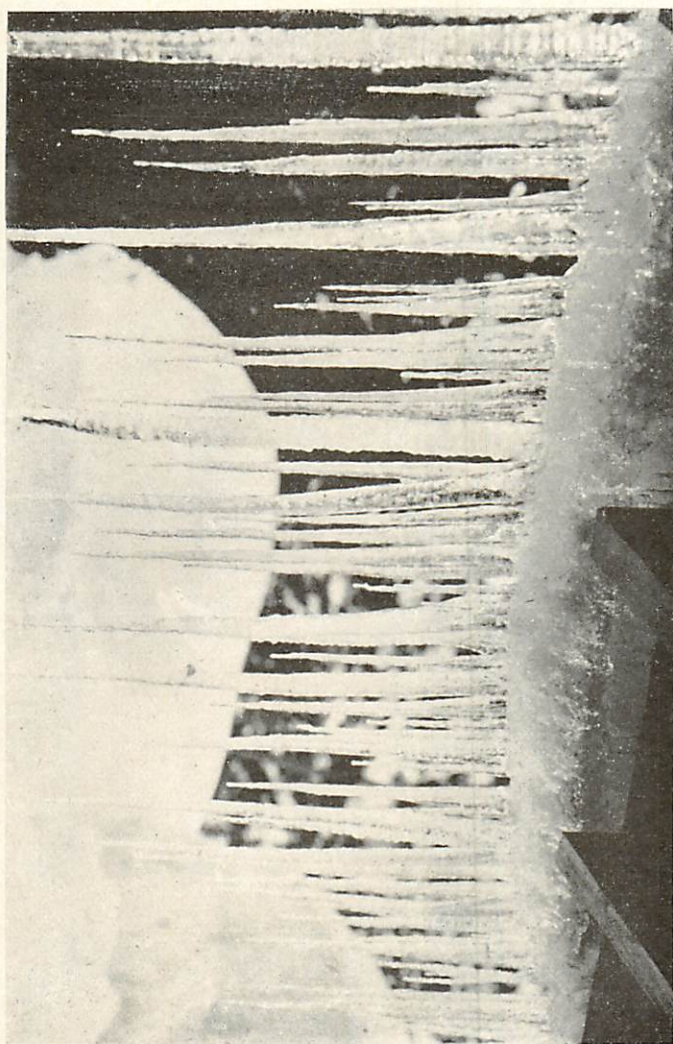
さうして勝手に都合よく定めたことを勝手に當日の競技

委員に押しつけるのもあまりに虫がよすぎ、又そうしたこ
 とにお互の連絡の機微を欠いて複合十八キロの様な選手の
 間違ひや四〇キロ米や十八キロ米の様な重複や不備の點を
 知りつゝも既に公開されし後では變更も困難でありますか

らコースだけはどうしても今後は秘に學生以外の權威ある
 當事者によつて決定さるべきものではないかと思ひます。
 以上デスタンスレースに就いて感じたことどもについて
 妄言してしまひましたが何かの参考になれば幸いです。

ヘルベチアヒツテ昨年の訪問者數

一 月	四九人	七 月	三四人
二 月	七六人	八 月	三三人
三 月	六二人	九 月	四二人
四 月	二三人	十 月	七九人
五 月	八人	十一 月	二二人
六 月	三〇人	十二 月	二五人



スキー小屋の窓より

岡田次郎

Die Beiden

伊藤秀五郎

Die Beiden

オスカア・エリツヒ・マイエル

「行爲と夢想」よりの譯章

「——先日カシミヤの奥地に這入つてゐた僕の友人の長谷川君が、ナンガバルバットの或る山稜を二万呎近く迄登つたと報告して來た。同君に會つてよく聞かなければ解らないが、さうだとしたらアラインゲーションとしては立派なものだと思ふ。世界も広い様で狭い。世界の屋根も段々低く近付いて來る様な氣がする。」

これは、現在甲谷院で仕事をしてゐる三田幸夫君から最近筆者にあてた私信の一節である。そして更に同君は、此頃は手許にある大島のものを読んでは何だか耐らない氣持になつて來る。彼が譯したデー・バイデンの一人こそ大島の様な氣がする、と書いてゐる。そうだ、實に大島君自身こそとりもなほさずその全生命を山に托した一人の熱烈なる登山者であつたのだ。

山に對して激しい熱情をもつてゐた、あるひとりの青年が嘗てある急な岩壁で夜に襲はれた。そこで、彼は氷河の恐ろしげに口を開けた裂目のうへ高くの狭い段狀になつた岩の上で朝を待つことにした。安全のために彼れは彼自身の身体を結んだ繩を岩にかけ、萬一の墜落にそなへて眠りについた。

半ば睡みつつあつたときに、偶と彼れにまで山の奥深くから沈痛にひとつの聲が聽えて來た。

「私は私の掌中に生と死とを握つてゐる。お前は高い山のうへでの死の早く到來する短い生涯を望むか、そ

れともまた大きな都市の厚い壁で圍まれたなかでの長い生涯を欲するか？」

青年は夢のなかで言つた。——「私は高い山のなかでの生涯を撰みます。死が早く到來することは、その代償であると思つてゐます。」

それより以後、彼れの生命は全く山に屬したものであつた。繩とピッケルはそのための用具であつた。彼れの存在の全部は暗い森、岩、萬年雪、或ひは頂の輝きであつた。

幾年か經つたのちのある夏のこと、ひとりの牧人がとある寂しい圍谷のなかで彼れの姿を見出した。夏の太陽が躊躇し乍らひとつの死骸を雪崩の雪塊のうへに曝し出してゐた。

話は、流行の氣分で人氣のある山を登つたり、斷崖の花摘みのために屢々數多く山を登る他のひとりのことになつてゐる。彼れにもまた夜がある時谷へ下りてゆく彼の行手を妨げた。彼れはその時同じやうに山の奥深くよりひびいて來る沈痛なその聲を聞いた。彼れは直ぐさまそれに答へた。——「私は都市のなかの生活

を欲します。それ故もう決して二度と山へはやつて來ません。」

彼れもまた幸福であつたと言はねばなるまい。なぜならば彼れは長い生涯を完ふしたのちに、しかも榮譽をもつて彼の墓石のなかに擔がれていつた故に。

そして、君は、自らに生きそして山を愛する君は、他のひとりを蔑まない。そして、君は、決して高きをあこがれることのなかつた君は、山での死がとりもなほさずその全生命であつたと言ふ死せる他のひとりをばまた尊敬する。君等はお互をば決して永久了解することはないものか？

(登高行第五年所載)

たしかに大島君はその一人に外ならなかつた。大島君は自ら、マイエルの「二人者」は自分に良いフラゲを與へてくれたと言つてゐるし、「潤澤の岩小屋のある夜のこと」(登高行第五年)といふ一文をみても、大島君の面目は、實にはつきり解ると思ふ。自らはまことに驚歎に價する偉大なる業績を貽しながら、而も社會的には何等著しい名を示さずに、恰も大空を流れる彗星の耀かしい光芒をのこし

て忽ち消え去るやうに、険しい山稜から永久に姿を消して了つた大島君をば私は、限りなく懐しく想ふものである。しかもあらゆる登山家の殆んど傾倒的な尊敬を宛めてゐるといふ事實は、とりもなほさず君の人格の崇高を語るものでなくて何であらう。おほよそ、世上の空名ほど取るに足らないものはない。君はよくこの事を知つてゐた。そしてかかる世間的な空名を自ら避けて、一途に山に全生命を投げ入れた君の眞摯なる姿こそ、實に私達の敬慕して止まなるところのものである。そしてこの後とも更に君に依つて導かれることの多かつたであらう私達にとつては、君の不幸は何物にも換へ難き大なる損失であつたのである。しかし果して大島君自身は幸福であつたのか、不幸であつたのか、私は知らない。唯私は、これだけのことは明言出来る山を自らの生命とし、山登りを自らの生活にまでとり入れてゐるものにとつては、所謂幸福といふものは實に單なる幻覺的な低い價値しかもつてゐない。何故といつて、彼らは始めから幸福などは求めてゐないからだ。敢へて求めるといふならば、それは幸福以上の何者かである。そして餘りにも多く、爲さなければならぬ事をもつてゐる私達が

敢へて自ら生命を斷つといふことは、勿論人生のうへでの敗北に相違ないが、しかし山での不幸は、而もそれが深い經驗と智識と周到なる準備のもとに於ての結果であるならば、最早それは何等他より批難され得る餘地はないものである。そしてそれは、山へ行く者の常に心のうちに用意されてあるところである、といふことである。もとより私ごときは、大島君にとつて實に末葉的な後輩の一人に過ぎない。しかし君から教へられることの到底筆紙に盡し得ない程大きかつたものとして、私の眼に映じた大島君の資性を通して、此が所感を述べるものである。

(一九二八・一二・二〇)

附記。私はこの一文を書いた後で、アルバーター登山の際の三田君の手記にあつた「フリーラー(ヘッドガイド)の歩き方は實に確實だ、それは、自ら私をして大島の歩き方を聯想せしめた」といふ短い言葉を思ひ出した。そうだとすれば、それ程に確實な歩みをもつてして、なほ山にその尊い生命を捧げた大島君こそ、實に日本のマンマリイだ。マンマリイであると同時に、また我國のエミール・ジャベルだ。そしてフィツシャード。確にそれは世界に誇る我國山岳界の至寶なのだ。時日の経過と共に益々大島君への思慕の情の切なるものあるのは、ひとり私のみではあるまい。

對象としての山岳

——「丘への生活」に答へて——

井 田 清

この「對象としての山岳」といふのは可成前に「山への生活」といふ表題で書かれた儘私の元にありましたけれど「生活」といふ事に何かしらひけを感じて居る私はどうしてもそれを人に語つたり示したりする事が出来ませんでした。今生活を對象と代へて私の經驗の道筋に山がどんなに働きかけて来たか、それを以つて今日きつと北千島の何處かの島に居られる貴兄へのお頼としたいと思ひます。

自分の生活の整頓と、何か抑へきれない山への思慕がどうしても私を書かさずには置かないのです。勿論拙い幼い自分は生長の上に一つの「許され」たい事としてこの一文を以つて貴兄を勞らはします。

又古く書れたものなどが途中で混つて居りますが、それも何か自分を明にするに役立つてくれると思ひます。

憶ふと言ふ事に楽しさが一層ます爲かもしれませんが、山から離れて居てじつと山の事を憶つて居る事は心樂しい事です。或時は何んだか唇でもかみしめたい淋しさに一杯になる事もあります。それでも山の事を憶ふて見ますといつでも私達の前に積まれ、重ねられて来た先輩の歩みの尊いには頭が下ります。その歩みのうづ高さに唯「山だ、山だ」と獨して呟く事もあります。それから又唯「あゆみ」と呼びかけて見る事もあります。するとそれらの歩みのうづ高さは何か鋭い光を私に投げて呉れる様な氣がします。

山を憶ふといふ事は或時は思ひ出と結ばれてひとりして靜に自分の心に囁かれる山となつて軽い心樂しい追憶と戯れる事もあります。或時は新しい峯々に煮えくり返る様な山戀しさと結ばれて、山は私を随分奇妙な人間にして終ひ

ます。

何かしらいつも私を短いその過去に振り向かせる黒い力は私に山を憶ふといふ事を随分懐かして来ました。山を憶ふ事で自分は支えられたんだと思ふ事がよくあります。

そして山が私を内から支へて居て呉れた力の事を考へて見ますと、それは又何處にでも見出される力であると思ひます。

花に、草に、木に、人に、家に、小島に私達の周囲にある何んにでもそれら山の力は感ぜられる様です。

唯私が山に對して働きかけた肉體的努力の烈しく強かつたその經驗が、他の何物よりも強く山を憶はせるのです。

そして今の私にとつて「やま」は何か凡ての感覺の代表かのように響き渡つて來ます。山は凡てのものの中に感ぜられると言つたのは、勿論その形を言つて居るのではないのです。山を眺め、山を憶ひ、登り、そして又山から離れてどの様にあらうとも絶えず心に働きかけて來る力の事です。自然の力をグッと他のものより一層強く私達に感じさせる山、それは私達が自然に對して感じ持つて居る觀念を何か暗示するかの様に——。そしてその暗示から自らの内に涌

いて來た力として私と共にあります。そして近頃の私の色々な心の行詰りは何時とはなしに大分山から私を引き離して居ました。朝夕の散歩がそれでなければ、知らず／＼の内に長びく散歩の最後は、親しい友の家の傍か、札幌の街を優しく抱いて居て呉れる小さな丘のよく見える所、それも住居の變る毎に變つて來て居ます。そしてその丘の方へも歩いて行かない様に友の家にもよらずに、又ふら／＼家に歸つて來るのが常です。他人と話しても軽くならない自分の心の重さをいくら嘲つて見ても、結局それは空威張りにはかならない事です。話にまぎれる物足らなさよりもいくら魂がぬけた様な歩みでも、その歩みの内に何かしら重い心が自分のものになつて、心の奥底に沈んで行つて呉れるブラ／＼歩きの方がどんなに希ましい事だか知れないと思つて居ります。そして私がこの札幌の町の中で歩み得られる道は幅広い坦々とした眞直ぐな道です。ローンがあつても、大きな古い樹があつても自分の歩みに張り合つてくれないこの眞直ぐな道は物たらなさに私に石を蹴らしたり並木の数を數へさせたり、家を數へさせたりします。古めいた美しい街道や、曲りくねる山徑がどんなに懐かしい事だ

か、いつも小じんまりしたお百姓屋の白障子や、お庄屋さんの土蔵や、白壁をよく思ひ出します。何處といふ事なく鎮守の森の暗いこんもりした静けさや、子供の集り遊んで居る細い街角を。妙な聯想が尙更の事私を山へ山へとひいて行きます。そしてちつと山―道―歩み―と、何か忘れかけた事でも憶ふ様に色々な事を追ふて行きますと……きつと女神でせう、女の人が塔の様な岩の頂きに立つて、攀ぢ登つて来る若者をいざなつて居る繪を思ひ出します。それからY先生がお子さんが御自分の體にかがりついて段々よぢ登つて行かれた時に、これが岩登りのはじめだと言つて笑つて居られた事や、ゲーテの *Fingerring* だつたと思ひますが、その内の *Engel Weibliche* の事、それから山に私自ら登る事と又山が私をひくその力を (*Halb zog sie ihn, Halb sank er hin……*) の句の内にも思ひます。随分妙な聯想だと思ひますけれど、何かいつも自分にある色々な考へや記憶が皆んな山と道、それから歩みの雰圍氣の様なものの中に憶はれるのです。

内なる山はあの象かたちからぬけ出て、道を傳ひそして歩みをたどり私の元にやつて來ます。そして煙草の煙の内にもそ

れから今私が聞いた汽車の汽笛の内になつて、それから夕暮れ時お寺の鐘の響にのつて、風の強く吹く日はこづか梢から、そして春には草花の生々しさから、冬には雪の山々の桃色の輝きや、月に蒼白い山々、それから雪の間に黒い黒い二本のレールから山は旅情にのつて訪れて來ます。そして又旅に出會ふ苦しい人々の姿、學校をサボつてはこつそり出掛ける山の途中に出會ふ悲惨な人々の姿は、そんな色々な山への夢を影も形もなく追ひ拂つて終ひます。そして俺は一体どうしやうと迷つて終ふのです。嚴しい生活の姿と金と時間と體に與へられた山行きとの暴風の様な争ひは私の内の磁石の針をぐる／＼唯あてどなく廻しました。町中を風呂敷にでもつつんで行きたいリツクザツクも餘り大きくてどうにもならず、人目をはばかる様に歩いて居ても山靴は大きな音をたてるし、何んだか自分でも段々うつむいて歩く自分をはつきり思ひ出せる様な氣がしてなりません。リユツクザツクの重さよりも、もつと／＼重いのは生活良心でせう。きつと。

アスファルトの上に響く山靴の音などは、或時は嘲笑の様に、そして春の荷と心のその重さは私の靴の踵をどんな

に早くへらして終つた事でせう。(これは最近私の氣づいた事です。餘り歩き廻るのでそれよりも歩く事を餘儀なくされるので随分早く私の靴はへります。何か重つたい考へは私を速に歩せないで踵が餘計にへるんです。)唯眞す

ぐに科學の道に這入つて行かれる人達がうらやましい氣がする事があります。私は私の性格が向つて行くまゝにこんな私の山と一所に行きます。顯微鏡の下に擴けられる驚きの世界は私の山の内にも心の元に擴けられて行くと思ひます。勿論直接山に觸れて行く事に依つて山から得られ、そして私の内に生長して行く愛の姿は、私の生命の上に種々な形の元に又生命を與へて呉れるのだと思ひます。それ故に私は私の山「私」が段々生きて行く上で自ら知り得られるものとして心の生長と一所にこの山をも求めて行きたいと思ひます。(以下「山への良心」より一九二六)

しかも私の内の山は命の體認の道の上に生長して行くものであつて、その私の山への入口は自然に對しての自然科學的認識(物質界の認識)からではない。それ故に又その過程を経て行くものではないのである。山を登る者として山を懐ひ、山を尊び、山にぬかづきたい様なそれから出發

するのであります。

そして山への良心とは私自身の歩むべき道への私の生活良心にぶくまれるものです。

山と言ふ一個の靜物を愛し得た私は、山に對して感ずる私の本能的衝動から山に對して生命感を持つ。山に登り始めたその動機は如何なるものであつても、山對私の内に湧く生命感には山を愛させるのである。私は山を愛する、それ故に私の山は又私の内にあつて私と共に體認の道を歩むのである。

丘に横たはる一時として、又山にある一時、私は私であるのか。私は木であり草であり、しかも土であり石であり空であるのか。そして山といふ自然の一つの内に抱かれるそれら木、草、石、流れ、それは一つ一つ山の心の内に生きて行く小さき私の心である私の内の私である。

こゝに特に山への良心といふ所の所以は、私が私の山行きの中に持ち得た生活良心の一つの表れであるからである。山の内に二日三日、そして長い時は一ヶ月近く生活して行く時に、山の内で私に與へられる衣食住を見つめる時に私自身の存在は自らのものであり、又與へられたる存在

である。

一つの生命が又一つの同じき生命のために與へられ、そして一つの生命は自ら生きしかも全体から生かされて行く私は木を倒し火をたき米を煮るであらう。そこに潜む生命の循環、しかも内なる山は私と共に生命の道を歩む。

木は切り得ない花はつみ得ない一つの生命となる。しかも自らの生活の營みの内に木は切られ草はつまれて行く。

私は木にすまないと思ふ、草にもすまないと思ふ。そして何かしら許してもらひたい私の心は貧しい喜びを又山の内にも求める。出来る限り山の内の命に對しての貧しい生活の喜びを求めたのである。山の内に私を生かさしてもらふのである。出来る限り小さい火をたき水も魚も草も、私は何かから分け與へられて生きたい。その内に自分を處して行く生活の貧しき喜びは又私の歩む道にあつて生活して行く者として持ち得る貧しき喜びであらう。(アイヌは最も美しい山の生活者である。)

繪の表現するであらうその内に在る眞實さ(生命)しかも山は各自の内に畫かれる様な一個の繪として、その内から眞をその人々の心に與へ感ぜしめるであらう。そして各

自は心のまゝに山を内に畫く。その自らの生活の深さにあつて。

こゝに一個の山がある。人が登る。そして何かそこに意味を感じる。しかしその意味を表現し得る人と得ない人がある。

こゝに一個の彫刻像がある。しかも人はその内に生命の躍動を感ぜさせられるではないか。

こゝに一個の山がある自然がある。こゝに一個のものがあつて、そして人がそれを驚き感じ考へる。そこに自分自身以上の何らかの意味がないと誰れが斷言し得るか。

山それは自然であり又「もので」ある又人間の如く。科學者は求めるであらう。繪家は畫くであらう。彫刻家は刻むであらう、生命を。私は山に自らの生命を求めるそして又自らの山への道を良心をになひ歩む。眼に見えない内なる山に眞に道を求めて、それ故に私の山は何處にもありう。繪に、詩に、音に、そして學に、唯私自らの力の求める道をそれに向うて歩むのである。

私は山に登り得なくともよい。私の傍には木があり草があり土がある。より強く深く自然を感じ、そして私の心が

それを知りたいので。

私の歩む私自身の道のために、私は山に行きたいのである（自然的本能の衝動は別として）求め知り得たその力に私をまかせただけだ、そしてその力の私への自證に眞實の生活を持ちたい。

自己發見への道として私の内の山によりたいのである。」
木を倒し得ない私が、木を與へられるその貧しい喜びの内
内に私が私の山手帳にしるし得たのは

「山と私、星と私と、私と灯と、私と雪と、夜と冬と……
あゝ貧しい喜は星と徹さな私は、山と。冬は雪と、
夜は影と。

あゝ一切を、一切をうす蒼白い冬の心は抱く。死は生に
生は死に、雪の床よ、タンネの香豊に、貧しい喜びは私
を山に山を私に安らかである。」一九二六、一月
と細い字で埋められた一頁に過ぎませんけれど、その時の
自分自らを木の様にそして他の凡ての生物の様に生かし得
た喜びは私の一生からどうしたつて離し得ない事です。そ
の時私と一所に山に寝て呉れた貝沼君には随分すまないと思
ひます。忘れたふりをして鉋も鋸も持つて行かなかつた

のですから。それから一年も経つた後の事でせう。

山を憶へばほんとうに生きて行かれる様な希望の希で一杯になつて來ました。山を憶へば私の妙な心も素直に何んでも愛せる様な喜で一杯になります。そして山の心から人の心へ溶け込みて行きたい願が湧いて來て、涙の出る様な人懐しさは私をよく丘の上に誘ひました。

そしてヘークの "Ich hab dich lieb, denn du bist Schon" は何んと親しい言葉だつたでせう。「トロ君」ならきつとあの眸でさう話して呉れるのでせう。「アイヌのとつとあんな」の眼も微笑も、きつとそれを私達に語つて呉れる事でせう。

その頃私が小さい手帳の隅つこに藏つて置いた「丘」といふ私の「山からの言葉」を光瀬氏は御自分の雑誌にのせて下さいました。私の好きな丘からいつも眺めて居たその丘や地平の「たわみ」といふ詩と一緒に。（詩だか何だかわからない。私には矢張山からの言葉といふ方が適當なのですが）山に憑れて私の言ふ言葉は全く妙なものです誰にもわからなくともいいと思ひます。「山からの言葉」は自分だけで藏つて置くのだと思ふ寂しさも山をさへ憶へ

ばその儘死んで行つてもいいと思はれる程強くなつて呉れました。

そして段々私の憶つて居る山は何んだか「山だ、山だ」と特別な事でもある様にわめきたてるのが恥しくなつて来ました。何時か十勝の豆汽車の中で會つた行商のおやぢさんの様に――別にそれが旅といふのでもなく、全く生活に直接にやつて来て居る旅の姿といふ様なものがほんとうの様に思へてなりません。別に旅に出たいとも思はないそれらの人々の心に泌みついた旅、それから私達の様に旅や山歩きに出たいと思ふ事、それらの間に含まれて居るものは生活を中心にして私達を乗り切らせずに置かない。苦しませずには置かない大きな渦でせう。其處で私を苦しめるものは何時も認識といふ事です。「山を疑ふ時」といふのも認識の道の入口の扉を私の氣狂ひじみた感情でドン／＼たゝいて居る様な……時々思ひ出しては今更の様に恥しくなります。

私をいつも苦しめる奴は自己意識と或高踏的な意識の結ばれる事でした。主観と客観の何か心でもえぐられる様な争ひでした。

山歩きも勿論その間に生活といふ大きなスケールの中で渦をまきどうしでした。

アイヌの姿が心に焼きつけられてからは尙更の事でした。親の脛かぢりのくせに「山を生活する」といふ事位にくらしい言葉は餘りないでせう。

旅といふ意識も旅にひたると心安く消えて呉れます。山も山歩きにひたるときにその苦しい意識や色々な觀念をすててくれました。認識がそれをすてて生活を心から喜んで呉れるのも何かしら信仰の心にあつての様です。それで居て私は山に在る事の餘りの喜びに唯譯もなく不安になる事がありました。餘り思ひ掛けなく、何か夢の様でもあつた山や谷や森や焚火や木や星や、全く安心の底で又妙な不安が私を苦しめました。

重苦しい生活の事實に信仰を忍従の内に抱き取つて行く人々と生活しやうと願ふ人々と求める所は安らかに生きてい、ありたい一つでせう。

絶望のどん底では涙も出ません死なうとも生き様とも。唯虚な眼と心で池に散つた木葉の様にち／＼として居るだけです。

そんな時頬を撫でてくれる風に氣付く事があります。稍がゆれて呉れるのに氣付く事があります。そしてやつと普通の人の様に立ち歸つてそんな時は何んだかあきらめて清らかにされた様な初めて山に歩んで行く様な喜びを感じます。段々大人になつて行くのが淋しい様に山に慣れて行くのも寂しいです。旅になれて行くのも怖しいです。

これからも私はこんな歩みを繰り返して行くだらうと思ひます。その間でいつも／＼私の良心が山の様に深く慎みある様にそれを願ひ乍ら私のこの「對象としての山岳」の前提を閉ぢます。そして以下同じ表題の内に「山からの言葉」を書きたいと思ひます。

對象としての山岳 (そのII)

こんな風に私の山に向つてひかれ結ばれた性格は、色々な思考や感情の中に私の個性やそして又私の山らしさを表す様になつて來ました。凡ての細胞がその中に全個體の特質を具へ持つて居るかの様に私の種々な生活の表れの上に私はどうしても山の表れを感じずには居られません。或夕方私は電車の窓から女デメンが二人手をつないで歩いて行

くのを見ました。そしてモルゲンタール氏の Gimsenreith を又思ひ出したのです。そして生きて行くといふ歩みの嚴しさをどんなに深く考へさせられた事でせう。山が今私にとつて一つの主張となつて來たと私は山への默契の内に書きました。おそらく、これを解つてくれた人は居ないでせう。

ほんの少しではあるけれど、山をしつかり摺めた様でもあり、そして又生きて行く上に何か内から私を支へてくれたそれらの山の力を憶へば、今更の様に生きて居る事を有難く思ひます。

自分といふものを意識しない人は割合に山といふ事も意識しない。殆んどないと言つてもよいかもしれないと思ひます。意識するなんて苦々しい事です。

一体原始人は自分の對象に何んと呼びかけたかは知りませんが、きつとはじめは何んにも感じなかつた様に思はれます。丁度私が幼い頃に何度も山を見て居ても記憶にない様に自分と何にも異つたものは感じなかつたのかもしれない。そしてあれが山だと叫ぶ頃には、自分、我といふ何か言葉か、叫びがあつた事だと思ひます。そして今山を意

識すると言ふのは唯君僕といふ呼稱ではなくて、そこに色々な思想的なものが混つて來ます。(少くとも私の場合)

それかと言つて私が山に行つたり、登つたりする事に何も思想的なものがあるといふ譯ではないのです。山に登りたいとか唯歩きたいといふ旅行慾といふものは、本能的な衝動で別にあの山に登つて草をとらうとか、石をしらべ様とかいふのではないので、唯頂に立つたり、谷間を歩いたりするのがうれしいといふだけの事です。そしてその喜びを持ちたいためにある「歩く」といふ肉体的な努力が強ければ強い程その喜も強いものとなつて來ます。(丘の喜は又次に)そして烈しい對象を求めます、岩とか氷とか。併しそれは勿論近頃の登山といふ場合の事で昔はきつと何か宗教的な事から始つたのでせう。

山岳の名に何か敬神的なや「驚き」からつけられた様なものなどかあつたり、それから行者參り、頂に祭られる神様などの事を思つて見ただけでも山を登り始めたそれは何か宗教的なものの様に思はれます。

唯思つたり眺めて居ただけでは私のいふ山は得られないのです。自ら歩んで行くならば小供が丁度何かを置く様に

山は自らのものとして内に表はれて來ます。歩くといふ事によつて得られる満足、それは審美感覺を満足させる裝飾の様なものです。そして山は自ら歩んで登つて行く事によつて、その心に得た喜びを示す自らのものになつて行きます。自ら歩みそして得られた山からの喜びはほんとうに何か子供の書く繪の様なものかもしれませんが、絶対に寫眞の様なものではないでせう。山の喜びは(この場合登られる山の意)歩むといふ事で唯單に眺め、寫眞に收められたそれと異つて來ます。心のスケッチの喜びとなります。そして登山といふ事が人間が歩くといふ事から何かその歩く事によつて未知のものに對して自分を示したいといふ欲求から生れて來た様にも思はれます。「……したい」と言ふ氣持は勿論自己以外の何ものでもありませんけれど、今「歩きたい」といふその心に與へて來る力の烈しさは山に登つて居るものにとつて確に戀愛にも劣らぬ烈しさで私達の心にやつて來ます。(一九二四・四月のアルペイナ「經驗としての山岳」ヤコブ・ミューレル氏參照)

「何故に吾々が山に行くか」と言ふ所に此の問題の本質的な深さが横たはつて居る。答は簡單だ。吾々自身のために

(持續的に經驗し得べき) 經驗したいと言ふのではなく、唯單に吾々自身のためである。吾々自身の生命に最も深く感ずる事を欲するのであつて、決してそれら生命の完成ではない。これらを吾々は常に倦怠する程味ふのである。そして肉体的努力は各々の經驗に對して必然的なものに屬する。即ち登山家の生活といふものが殆んど戀愛に近い大きな烈しさの又一つの經驗である事に基因するのである……」

實際歩くと言ふ事は山を對象に持ち又旅を憶ひ又言ひ換へるならば、何か吾々自身のためのものを感じ持つ様になるときに、あの鈍重な歩みも私達の血潮の感ずる舞踏のリズムと何等變る所がない様に思ひます。躍りたい、叫びたい、笑ひたい、泣きたいその様に又歩きたいのだと思ひます。それらは歩きたいと言ふ本能的な自然的衝動であの山へ行きたい、何故行きたいのかと言ふ事には關しません。一つの限られたあの山といふそれに行きたい登りたいと言ふのは自分の心に何か暗示の様に響いて來て居る唯漠然と山へ行きたいといふ―そしてそれが心の内に起つて來たのは古い經驗に喚起された欲望から始まります。

あの山といふ其處に或限られたその山の持つ形象に心ひ

かれるその力は自分自らの内にあります。人間がその山に與へた心の動き(不確實な言葉ではありませんが)です。人の心が何かその對象に働きかける力は、その對象がその力を持つて居るのではなくその人の心を持つて力である様に、山を愛するといふ事もその對象が人間の時と同じ様に矢張り愛するものゝ方にその愛はあるのだと思ひます。それで山に對する人々の色々な考へも凡てその人達の個性の上に立つて形づくられて來ます。山の場合愛しても愛されないそんな苦しみは何か自分の心の苦しみのために山から長くはなれて居て山に行きたくても何か行かせないものがある時の様です。山を愛して居る事に變りなくとも何か山から愛されないと言ふ様な厚ほつたい氣持がします。そんな時は唯一途に山に這入つて行く事で又山の透명한喜びを取返し又自分も蘇み返れた様な氣持がします。そんな時に自分の愛が例へて死に終つた所でそれはどうとも仕様のない事です。山と自分の間の感情はどうしたつて偽れないものです。偽れば結局自分にいつかはる事になるし随分な苦しみです。そんなら一体私の言ふ山を形づくつて居るものは何んでせう、といふ事になります。それは私だといふよりか外に仕

方ありません。

「私自身でない私は山、私の私でない何か譯のわからぬもの山」とかう山手帳に書かれてありますけれど、矢張りさうだと思ひます。

山の内に血や肉や骨格や外貌と言つた様なものを——譬へが變ですけれど——感ずる譯です。自分自身の表示であるものを歩む事に依つて感ずるのです。(未完)

本誌前號「シュネーリクンテにおける二三の誤謬について」の記事中次の通り誤りを訂正します。

頁	段	行	誤	正
二一八	下	一八	氣 歴	力 力
二一九	上	一九	氣 歴	力 力
二二〇	下	四	永 點	水 點
〃	〃	〃	點下であつても	點下であつても
〃	〃	〃	普通氣温が	普通氣温を
二二一	上	三	明 了	明 瞭
〃	〃	〃	各別にその	各別にその
〃	〃	〃	再び氷り	再び凍り
二二二	下	八	六方晶形	六方晶系
〃	〃	〃	明 了	明 瞭
二二三	下	二八	沸 騰	沸 騰

三ノ瀬村

私をして不思議なくらゐるに、そこをして、そのときをして忘れ難くせしめ、常にそこをおもひだす毎に、たとへようもない哀憐な、同時に美しい一つの情感を味はせてくれたものは、この三ノ瀬村だ。尤も多くの人々は時をちがへれば、こんなたゞ寂しい、ひつそりとして、おまけに人のいやがる病ひのあるといふ山のなかの小村などには、どんな醜情もなくて通り過ぎてしまふかも知れない。おそろしく私にしても、その時をちがへたら格別の深い情景を感じることもなく、その山村もうち過ぎて行つてしまつたかも知れない。

三ノ瀬村はよく秩父の將監峠や、唐松尾、雁峠へなどにゆくとき通る多摩川水源地奥の山村のひとつだ。私はこの村についていろいろのことを知つてゐるために、こゝにその村のことを書くのではない。寧ろ私はこの村のことはた

つた一度極めて深い感興を残して、そこを通つたことがあつたのを忘れかねてゐるからである。けれどまたこの山あひの小村のもつテイロールの山村のやうに、明るく、けれどまた日本的に少し、もの悲しげな村落風景も勿論私を魅了するに充分だ。順序としてすこしく三ノ瀬村について書こう。

三ノ瀬村はたしかに他の世界とは隔絶した村だ。地形のうえから云つて、また實際その村の人々の氣持から云つても、ともにそうだらう。まづ地形の方から云へば、この村は一ノ瀬、二ノ瀬、一ノ瀬高橋の三つの小村と共に、ぐるりをすつかり大きく、山の屏風でとりかこまれてゐるやうだ。西から北の方は雁峠から笠取、唐松尾、牛王院、將監峠の高い奥秩父の蒼頭な、古めかしい尾根だし、南と東は柳澤峠と雁峠のあひだの名もない尾根が、これもたかくつ

いてゐるし、それから分れた枝尾根が、犬切峠の尾根になつてゐる。そしてそのうち展げた平地のなかを快活に、清新にそうくと早瀬をおとして三ノ瀬川と云ふ小川が東へ谷となつて、急に狭くなり乍ら多摩の谿谷へ流れてゆくのである。その谷も決して展げてゐると云ふやうには村からは見えない。なぜなら兩側の山側が、つとせまつてゐるその谷の幅が極くせまく、流れも急なので、道がつけられないほどなのだからである。そんな山で、とにかく、一方は低くとも、とりかこまれたなかに、前にあけた一ノ瀬、二ノ瀬、一ノ瀬高橋の村々がひとかたまりに、それからそれらの村と小さな尾根をへだて、おなじく山あひの、もの寂びた草原のなかに三ノ瀬の村が世をへだて、の平和な營みをしてゐるのである。それは犬切峠は高いとか、峻しいとか云ふやうな峠ではないにしても、峠を越えねばどこへもゆけぬと云ふことは、人をしてたしかにそこが他の世界とは少しくかけはなされてゐると云ふ感じを抱かしめる。また實際に於てもそうだ。東京をあまり遠くも離れてゐないで、停車場を下りてから半日と少しで行きつける所のくせ

に、こゝはたしかに交通線を遠くはなれてゐる。近くにも大きな町もない。ちよつと珍らしいほどに場所も變つてゐる。この村々の谿と畠とをつくる山あひの美しい平地を、うしろの高い唐松尾の下あたりの林道から見下すと、山ふもとの寄り合つたなかに、あをくと緑色に、可愛らしい小さな平になつて、それはいきくしたものの色と影とを反射してのぞめる。實にうまいところに人は己れの住む境地をみつげるものだ、私はつくづく感じさせられたことがあつた。

もうひとつの村人の氣持の方からといふのは、實を云ふと、この山あひの村すべてが、人から嫌はれてゐる忌はしい病ひ——癩病の村なのだ。だが私はきつぱりと斷言はしない。その後その村を通る度に會つた村人のうちにはそうでないのもゐるから。けれどたしかに私は犬切峠の下で、白手拭をふかくかぶつたそれらしい村の女のひととすれちがつたことがあつた。このことの正否はどうでもいゝとして、とにかくこの村人は他の村とは交融してゐない。實際をする村もないのだが。そして見知らぬものが犬切峠を下

りて村へやつてくると、遠くからわかるとみえて、二ノ瀬の村子供等をまつさきに、大人等までが近寄りもせず遠くはなれて、畑のふちや家の前にかたまつて、そのエトランゼを見つめてゐる。これは現に私のあつたことだ。まるでいつか越中の有峯へ、飛彈の和佐府から越えて来たとき川で釣りをしてゐた有峰の子供が私等の來るのを見てびつくりして、一生懸命竿をすてゝ逃げて行つたときと同様におかしいやうな、きまりが悪く、ていゝやうな氣がした。有峯の子供や大人はたゞ「子供のひとみしり」のやうな、可愛らしいものだが、この二ノ瀬の村の人々の視線には、悪意はないにしても、一種の云ひやうのないひがみがあるやうに思へた。これは僕があまりに敏感なのかも知れないが、僕のそのとき一緒にゐた友も「いやなとこだなあ」と思はずも小聲で言つてゐたから、おそらく僕とほど同様な感じだつたのだらう。とにかく、この山あひの村はそんなとこだ。村人は他との交融もなく、わづかばかりのその山あひの畠地を耕して、沈んだやうな、寂しい、けれど平和な生活をしてゐるらしい。これだけしか僕にはこの山のなかの村々は映らない。尤も例の病氣の件が氣にかゝつてふ

かくそこに入つてみる勇氣もないのだ。

これらの村のうちでも、前に書いたやうに三ノ瀬の村は他の村とはまた山をへだてゝ、美しい谷の小流れと、白樺と草原とをもつた山あひの平地のなかにある音もしない、死んだやうな村だ。こんな山奥の村のなかに、人もすまない空家があるからおどろく。おそらく例の病氣で死に絶えてしまつたのではないかと、僕は想像してゐるのだが、それはどうかわからぬ。けれどもたしかにこの村のもつ村落風景は美しい。悲しいまでに美しい。もしもこれが、普通の他の山村であつたら、僕はきつと何度もその村の家に泊つたらうに。それほどいゝところだ。しかし、村の人にはどうもなじめない。ある時は村の子供等は私に犬をけしかけ、ある時はよい林道のあるのに、古い朽廢したヤブ路をわざと教へたりしたので、私は村人には憎しきは決してもたないまでも、こゝろよいとは思つてはゐなかつた。しかしそんなことは私がこの村を通つたとき得た、この山奥の村でなければないやうな情景を思ひ浮べると、すっかり忘れてしまふ。そして美しい、寂しい、他の村との交融のないその村の人々の生活を想像する。

では、その情景とはなんであつたのか。私はその情景と云ふのを、實際には目撃してゐないのだ。想像の情景なのだ。あるひとつの點景からして想像された情景なのだ。

それは八月の末の夕ぐれだつた。私と私の文學をやつてゐる友達のとりととが大切峠をこえて、その山合ひの村に下りてきたのは。その時だつた。前に書いたやうに二ノ瀬の村の子供や大人等が村の家かけから、畑からやつて來て私等を何しにやつて來たかと言はないばかりに、言ひ様のない眼つきで少しはなれて私等の通つてゆくのを見送つてゐたのも、それから三ノ瀬の子供等が私等に遠くから犬をけしかけてゐたのも。私もまた私の友達も、その三ノ瀬の村落に入つてからは、美しい村のある山合ひの平地の風景に感心しながら歩いた。私等はその時將監峠のうへにある仙波の小屋へゆくつもりでゐたのだつた。しかし一人の友はあまりに足がつよくないので、とてもそんな時分から將監峠の上まで辿りつくことは出来そうもなかつた。でも私等はこの三ノ瀬の村へは泊る氣は勿論なかつた。私等にはまた三ノ瀬から將監峠への林道を通つたのははじめてであつた。それで私等はまだ村に入らぬ前に村をとりかこんでわ

づかばかりある畑地で鋤をふるつて働いてゐた一人の村の若者に、將監峠へのほる道をきいた。そしてそれに従つて私等は村に入つた。村のなかはひつそりとして、聲高な大人の話聲もなく、甲高い子供のさけび聲もきこえず、紡車のぶらぶらもひびかず、鶏さへもなかないほど靜かだ。村の古びた藁屋根の家々のなかをぬけても私等は村人のひとりにも會はない。道をきくのさへ困つた。木を挽いてゐる鋸の音がする方へと私等は近づいてゆくと、突然けたましく犬が吠えついてきた。すると、それから程遠い村端れの家かけからいつともなくまた村の子供等があらはれて、近寄りもせず遠くから私等にその犬をけしかけるのだつた。私等は一時少なからず不快な氣持になつた。道を妙な村の家の前庭にぬけて、私等は村のうしろの畑地へ出た。そしてかまわずに村の家々から畑へ通ふ細々しい道を出はづれて、將監峠へ登る道と、さつき村の若者から教はつた村のすぐ上の丘の稜線のうへにつけられた道へ出ようとした。するとこの寂しい山のなかの村の墓地へ私等の道は突きあたつてしまつた。草木瓜の花がその朽ちくづれた臺石の間に咲いてゐる。小さい墓地、平和に、ひつそりと、すこし悲

しく、この村に生ひ育つて、そのまゝまたこの村より一歩も出ることなしにこの地上から去つてしまつてゐた村人のかすくが苦蒸して眠つてゐるといふひとつの世界。そのなかにひとつまた私等の眼をみはらせたものがあつた。それはひとつのまあたらしい、白々した、建つたばかりの卒塔婆であつた。ゆゑしらす私等の眼はちらとそれをよんだそれはすぐ數日前に死んだ二十にみたぬうら若い村の娘のものであつた。

空想と想像力をつよい二人の青年は、このごくわずかの一點景に依つて、あのポール・フォールの「バラッド・フランセーズ」のなかにあるひとつのかくれた田園の深い情景をうたつたバラッドをつくりな情景をまたこの日本のかくれた山村にあてはめてみたのであつた。そして二人がそれについていゝ氣持になつて語り合つてゐるうち、そこから見下した三ノ瀬の小さな村全体が可愛らしくひと眼に見渡せる高みまでそのをねのみちといふのを高く登つてゐたのだつた。

そのポール・フォールのバラッドと云ふのは、あの名高
い Ballades au hameaux のことだ。

Ballades au hameaux

Cette fille, elle est morte, est morte dans ses amours.
Ils l'ont portée en terre, en terre, au point du jour.
Ils l'ont couchée toute seule, toute seule en ses amours.
Ils l'ont couchée toute seule, toute seule en son cercueil.
Ils sont rev'nus gaiement, gaiement avec le jour.
Ils ont chanté gaiement, gaiement: "Chacun son tour,
"Cette fille, elle est morte, est morte dans ses amours."
Ils sont allés aux champs, aux champs comme tous les jours.

Paul Fort [Ballades françaises.]

このバラッドは古くは上田敏博士の名譯があり、最近に於てはまた堀口大學氏の譯詩集「月下の一群」のうちにも同じくこのバラッドの完璧な譯詩が收められてあつたが、こゝでは、それにも拘はらず私の拙ない譯詩をのせることをゆるされたい。上田博士の譯詩では、このバラッドは「この娘」と云ふ題がつけてあるが、堀口大學氏はまたそれを踏襲してか、或ひは先人の仕事を尊んでかは知らないが、また「この娘」と同じ題をとつてゐる。私はたゞ私の氣分

でこれを譯した。優秀は勿論比較にもならないことだが、とにかく私のをのせることにした。

寒村の唄

あの娘、あの娘は死んだ、その戀のさなかで

村人達は彼女を運んだ、墓場へ、墓場へ、夜明に

村人達はたつたひとり彼女をねかせた、たつたひとり、花に包んで

村人達はたつたひとり彼女をねかせた、たつたひとり、棺のなかに

村人達はかへつた、元氣で、元氣で、日の出とともに

村人達はうたつた、元氣で、元氣で、「誰しもその番がくりや死んでしまうんだ」

「あの娘、あの娘は死んだ、その戀のさなかで」

村人達はかけた、野良へ、野良へ、いつものやうに。

これは遠い佛蘭西の、またかくれた田園の片ほとりでのことだ。こんなにも明るい、美しくもまた愁ひふかい情景は決してこの三ノ瀬村のやうな日本特殊の、暗い、沈んで陰

氣な村人達の氣質キズナのうちからは生れてるものではないかも知れない。けれど私等はあかるい若者だつた。こんな、すがすがしく、晴れやかな、美しい村景色をもつた村のなかでの、また特に人の世をはなれて靜かに生活してゐる村のことだから、私等は先刻のあの若くして死んだこの村の娘のことも、またボール・フォールのうたつたバラッドのなかの、あの「戀のさなかで」死んでゐつた村娘のやうにおもひたかつた。そして私等二人の青年の官能に色をつけて映えたものが、すなはち、私のいふ想像された情景なのである。

こんな他村との村づきあひもない村だから、村人達はまたそれだけ仲がよく、お互ひをたすけあつてゐることだらう。この廢村に近いやうな、死んだやうに生氣のない村にだつて、若者と娘は居るのだらう。そしてまた彼れ等のあひだにだつて、他の村とおなじやうに、たのしい、人知れぬ戀も芽ぐもう。そしてその「戀のさなか」で、寂しくも一人死んでいつてしまつたあの村の娘の、その一人の若きものゝ死から、ふかい情熱が村の若者達にひびいて、その悲しみを却つてあかるく、清く、高く、花やかにさえ歌ふ

やうな歌の心がこもらう。そうしてまたひとつのふかい感
激が若者たちの心をうごかさう。そうしていとさうやかに
寂しいその村娘の葬式は、村の老人と若者との手でとり行
はれたらう。寺もないこの小村では、たゞ村の墓場へもつ
ていつて埋めるのみだらう。その歸り途で老人は若者たち
に言ふだらう。「だれも番が廻つてくれれば、みな死んでゆ
くのだ。たゞそれがおそいか早いかだ。」けれど若者たち
は「戀のなかばで死んだ」彼女をいとほしく思つたらう。

そしてその愛人だつた友達の若者をなくさめたらう。そし
てかへれば、すぐと老人たちも、若者たちも、いつものや
うに村をかこむで少しばかりある貧しい畠地へと、彼れ等
の日々の仕事のために出掛けていつたことだらう。

おそらくこんな風に、ポール・フオールのうたつたとお
なじやうな情景をもつて、その村娘の葬式も行はれたであ
らうと、私等二人は想像したのだ。私等もまたそのさびし
い葬列への心の會葬者であつたのだ。そうすると、いまの
いまでその村に對して有つてゐた不愉快な感情は、全く
その村々の山から來た夕風のやうにすゞやかに私達の胸か
ら離れ去つて、その村の高みから眼の下にすつかりみわた

せる三ノ瀬村が、そのかすみくれる夏の夕べの色と影とを
いつばいにした村のすがたが、眼に見える感じをとらへる
以上に強く、なんともいへず、ふしぎにうるはしいものと
なつて見えた。私等の思ひと官能とは洗ひきよめられた。

私等は日の暮れるのも忘れかけて、じつと腰まで下して
そこからしばらく村を見下した。とてもすぐに立ち去る氣
にはなれなかつた。そこから見下す村全体のうへには、は
つきりとひそやかに色の濃い夏の夕ぐれの疲れた感じが下
りてきてゐた。野良がへりや山がへりの村人の小さな姿も
さすが夕方となればちらほら村のなかにうごいてみえた。
子供の甲高くさはぐ聲までが、とほいやうで近くに手にと
るやうにきこえた。けれど灯もともらずにこのふしぎな村
ち上つて、また尾根の廢路となつた道をのほりだしたのは
丁度その時分だつた、もう一度その夕暮をはなれて、夜の
下にある村をかへりみて、私等のふかい心の印象畫を、い
つそうしつとりとした情感に染めながら。そしてその尾根
のうへの炭焼小屋の朽ちた痕に、私等二人は夏の短かいひ
と夜を明した。

私の三ノ瀬の村について、はなれがたいひとつの愛情を
かんじてゐるといふのは、その夕暮に村の上の丘の尾根み
ちから見下したといふその時の村景色と、ポール・フォー

ルのバラッドにうたはれたやうな、かくれた田園の哀れふ
かい、けれども明るいひとつの情景に對する私自身の感興
よりなつてゐるものである。

御 断 り

三月休刊致しましたから、四月號を倍大號にする筈で、御座い
ましたが、都合により五月を倍大にする事に致しました。

岡村源太郎遺稿集

スキーデイズタンスレース

完 成

限定五〇〇部

体 裁 菊判 三三〇頁 假製綴

紙 質 上質紙 寫真版六葉

實 價 金 貳 圓

發 兌 札 幌 山ミスキーの會

小 樽 梅屋運動具店

御申込は甚だ勝手ですが成るべく小樽稻穂町梅屋運動具店宛にお願い申します。

山ミスキーの會



SKI HEIL

スキート
ト
其用具全般

中野商店

スキー即ハバ

第一 第一
級 級
大 大

札幌



圖林漸大瀨遊博東

山ニスキーの會

東家五〇〇番

GET SUPERFINE SKEES.
 AND MAKE AN
 EXCELLENT
 RECORD!



具用其ト一キスルナ秀優

樽 小
 店 具 動 運 屋 梅

北海帝國大學キス一部及同山岳部御用



登山靴とキス靴

各種

札幌市南一条十街

木本靴店

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されることをお願いします、又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願い致します。

*六册分前金拂込の方には送料を頂けません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雑誌の代價は頂きます。

昭和四年四月廿八日印刷
昭和四年五月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 **山とスキーの會**

振替小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo

No. 91. Aprilo 1929. Sapporo, Japanujo.

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和四年四月二十八日印刷
昭和四年四月二十八日發行

—メタに比類なき—
冬期登山・家庭・旅行に
携帯便利・安全燃料

『METAメタ』

50錠入一函 ¥ .80

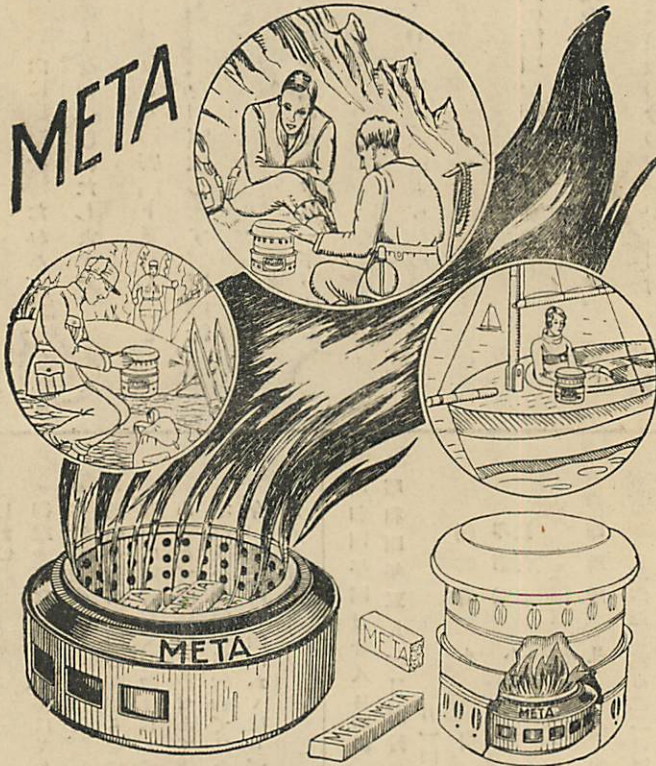
メタ、コツヘル・アブラート (アルミ製炊事具の類)

No. 80 (2pints)	¥ 4.50	No. 90 (フライパン)	¥1.50
MARIO (1½")	¥ 3.00	No. 50 (META-BURNER)	¥1.65
No. 70	¥ 2.50		

北海道地方

梅屋運動具店・富貴堂・小谷運動具店
今井呉服店・川口屋銃砲店運動具部

品切れの節は
直接美満津へ



全國運動具店にあり・メタに比類なし

瑞國「メタ」安全燃料
及びアルミ容器 日本運動具店總代理店

美満津商店

東京 本郷 赤門前

振替口座 (東京) 760
電話 豊 (小石川) 845

山とスキー 第九十一號

定價金參拾錢